

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	成育日記が母親にもたらす影響
別タイトル	Effect of the growth diary on mothers
作成者（著者）	中澤, 絵里菜 / 野田, 玲穂 / 加茂, あゆみ
公開者	東邦看護学会
発行日	2018.09.01
ISSN	21855757
掲載情報	東邦看護学会誌. 15(2). p.23 29.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	研究報告
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohokango.15.2.23
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD24112037

【研究報告】

成育日記が母親にもたらす影響

Effect of the growth diary on mothers

中澤 絵里菜¹⁾, 野田 玲穂¹⁾, 加茂 あゆみ¹⁾

Erina NAKAZAWA¹⁾, Naruho NODA¹⁾, Ayumi KAMO¹⁾

要 旨

【目的】成育日記を使用していた母親の気持ちを知り、成育日記が母親にどのような影響をもたらしたかを明らかにする。

【方法】A病院に入院した児（出生体重1,500g～2,300g）の母親で、本研究に同意を得られた3名に半構成的面接を行った。得られたデータから逐語録を作成し、カテゴリー化を行い考察した。

【結果】分析の結果、10個のサブカテゴリーと3個のカテゴリー【看護師との信頼関係を築くきっかけとなる】【育児への自信につながる手段の一つとなる】【児を育てることに対して前向きな気持ちになる】が抽出された。

【考察】成育日記は、母親と看護師の信頼関係を築くきっかけとなっている。信頼関係が構築できたことで母親は自分の気持ちを表出でき、育児に前向きに取り組むことができていた。また、成育日記には退院後の育児に役立つ情報が記載されており、育児への自信につながっていた。以上から、成育日記は、母子関係の構築や母親と看護師の信頼関係の構築において重要な役割を担っている。

キーワード：NICU 成育日記 母子関係 愛着形成

I. はじめに

周産期母子医療センターに入院した児とその母親は、出生直後から母子分離状態を余儀なくされる。特に早産児の場合、母子分離状態が長期間に及ぶことが多く、母子関係が構築されにくい環境であると考えられる。先行研究では、成育日記は医療者と母親の良いコミュニケーションツールとして機能しており、母親はコミュニケーションを介して次第に児の状況を受け入れ、母親の自責の念を軽減し前向きな気持ちに変化することが指摘されている¹⁾。また、入院中に児へ行っ

たケアを振り返ることができ、母親役割の意識を高めることにも有用であると述べている²⁾。以上のことから、成育日記は母子関係を築くことに効果的な手段の一つであるといえる。

各医療機関によって記載内容や頻度、誰が記載するか等の運用方法は異なっている。B病棟では母親へ児の状態を伝える手段の一つとして、児の成長がわかるように担当看護師が体重やミルクの量を記載し、写真や足型を取り貼る等工夫した成育日記を作成している。また、担当看護師・両親共に記載内容や頻度に決まりを設けず使用し、両親へ面会時自由に記載して良

¹⁾ 東邦大学医療センター大森病院

¹⁾ Toho University Omori Medical Center

いと説明している。そこで、成育日記を使用していた母親の気持ちを知り、B病棟の成育日記が母親にどのような影響を与えているかを明らかにし、今後の成育日記のあり方についての基礎資料としたいと考えた。

【用語の定義】

成育日記とは、担当看護師が日々の児の様子を記載するB7サイズのノート。

II. 研究の目的

児がB病棟に入院中の母親が成育日記を使用したときの気持ちを知り、成育日記が母親にどのような影響を与えているかを明らかにする。

III. 研究方法

1. データ収集期間

平成27年10月～12月

2. 対象

平成27年度、B病棟に2週間以上入院している出生体重1,500g～2,300gの低出生体重児（合併症がある児は除く）の母親で、協力の同意を得られた母親3組を対象とした。研究対象者の募集、インタビューに関しては、担当看護師以外の看護師が行った。

3. 研究方法

児の退院1ヵ月後の健診時に、母親へインタビューガイドを基に半構成的面接法で1人30分程度実施した。インタビューで得られたデータから逐語録を作成し、成育日記が母親にもたらした影響に関する文脈を抽出し、カテゴリー化を行い考察した。

IV. 倫理的配慮

東邦大学医療センター大森病院倫理委員会の承認（審査番号:27-118）を得て実施した。研究の目的・方法・情報の守秘義務・研究協力は自由意思であることを書面および口頭で対象者に説明し、同意を得た。また、

研究を拒否・途中辞退しても治療・看護に不利益がないことを伝え、得られたデータは研究以外に使用しないことを説明した。本研究に使用したデータは鍵のかかるロッカーに保管し、パスワードのかかるUSBに保管した。インタビューはプライバシーが守られる個室で行った。同意書に明記した時間を超えないように留意し、母親より授乳等の中断の希望があれば中断することを説明した。

V. 結果

1. 対象者の属性

母親の平均年齢は34.7歳、出産経験は初産婦2名、経産婦1名であった。児の在胎週数は31週～35週、体重1,500g～2,000g、入院日数は40日～54日間であった。

2. 成育日記を使用しての母の気持ち

逐語録より、成育日記を使用しての母親の気持ちとして167の語りを抜き出し、内容を整理してコード化し24のコードが抽出された。これらのコードは10個のサブカテゴリーと、【看護師との信頼関係を築くきっかけとなる】【育児に対して前向きな気持ちになる】【育児への自信につながる手段の一つとなる】の3個のカテゴリーに分類することができ、表1に示した。以下、カテゴリー【】、サブカテゴリー< >、コード[]、対象者の発言「」で表にした。

【看護師との信頼関係を築くきっかけとなる】は、< 気持ちを表出する場を持つことができる > < 頼れる存在が身近にいると感じる > < 寄り添ってくれると感じる > < 児を大切にしてもらえると感じる > の4個のサブカテゴリーより構成された。< 気持ちを表出する場を持つことができる > は、「全部ここで吐き出して。別に深い答えをしなくても、ちょっと触れてもらっているだけでガス抜きできたっていうのが、本当に助けてもらったノートだった」というように母親を感じる不安や心配な気持ちを自由に記載できることで、[治療や検査への不安な気持ちを表出できる][日々の気持ちを聞いてもらえる]場として活用されていた。< 頼れる存在が身近にいると感じる > は、「小さく生まれた子どもを持つ友達っていうのがいなく

表1. 成育日記が母親にもたらす影響

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護師との信頼関係を築くきっかけとなる	気持ちを表出する場を持つことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の気持ちを聞いてもらえる ・治療や検査への不安な気持ちを表出できる ・同胞の児の受け入れについて不安な気持ちを聞いてもらえる
	頼れる存在が身近にいると感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・児のことを相談できる存在を見つけることができる ・児と一緒に見守ってくれる存在がいることに気づくことができる
	寄り添ってくれると感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師と気持ちの共有ができる ・児のことを一番に把握してくれている看護師とやりとりができる ・看護師の気遣いを感じる
	児を大切にしてもらえるとを感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・できないことを看護師が代わりに行ってくれる ・児を看てもらっていることをより感じる
育児に対して前向きな気持ちになる	児の成長を感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・児の成長記録を残すことができる ・児が健康であることを知ることができる ・児の成長を振り返ることができる
	自責の念が緩和できる	<ul style="list-style-type: none"> ・小さく産んでしまったからこそ気になる内容を知ることができる ・小さく産んでしまったことへの罪悪感を軽減できる
	気持ちを吐き出すことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問を聞いてもらえる ・専門家に話を聞いてもらえる
	面会に来るきっかけができる	<ul style="list-style-type: none"> ・精神的支えとなる ・成育日記を読むことが楽しみであると感じる
育児への自信につながる手段の一つとなる	自分の知らない児の情報を知ることができる	<ul style="list-style-type: none"> ・面会時間外の児の様子を知ることができる ・入院中の授乳の様子を知ることができる ・知りたいと思う情報を知る手段ができる
	退院後の育児に活用できる情報を得ることができる	<ul style="list-style-type: none"> ・児に合わせた育児を知ることができる ・今後の育児の参考にすることができる

て、持っている不安っていうのを話してもわからないだろうっていう前提で、特に話してなかった」というように、母親は周囲に児のことを話せる人が少なく孤独感を感じていることがわかった。「担当の方であればいろんなことを話していいのかなあっていう、まあ、頼りになるっていうか」というように、看護師が児を大切にしてくれていると感じることで「児と一緒に見守ってくれる存在がいることに気づくことができる」きっかけとなっていた。また、「担当の看護師さんと

やりとりできるということが、意味があるかなって感じだった」というように、「児のことを相談できる存在を見つけることができる」ことで、母親一人で抱え込むのではなく、頼れる存在が身近にいることができていた。《寄り添ってくれると感じる》は、成育日記を通して看護師が母親の気持ちに寄り添い、共感することで「看護師の気遣いを感じる」「看護師と気持ちの共有ができる」と感じていた。また、「児のことを一番に把握してくれている看護師とやりとり

ができる] ことで安心感があり、寄り添ってくれていると感じていた。《児を大切にしてもらえると感じる》は、「担当の方が、言葉を尽くしていろいろ書いてくださると嬉しい、こういう風に思ってくれていることがありがたい」というように、写真や足形・手形だけでなく、工夫された成育日記を見ること、看護師の思いが込められたメッセージを読むことで「児を看てもらっていることをより感じる」ことができていた。また、母親が児に対して直接「できないことを看護師が代わりに行ってくれる」ことで看護師に児を大切にもらえていると感じていた。

【育児に対して前向きな気持ちになる】は、《児の成長を感じる》《自責の念が緩和できる》《気持ちを吐き出すことができる》《面会に来るきっかけができる》の4つのサブカテゴリーより構成された。《児の成長を感じる》は、日々の児の様子を記録に残し、いつでも振り返ることができる手段があることで「児の成長記録を残すことができる」「児の成長を振り返ることができる」「児が健康であることを知るることができる」と感じ、より児の成長を感じるができていた。《自責の念が緩和できる》は、「本来だったら生まれてすぐに一緒にいられるはずが申し訳ない」「かわいそう」というように自責の念を抱いていたことがわかったが、「毎日どれくらい飲んでこれくらい大きくなってんだ」と成育日記で児の様子を知り、児の成長や児を身近に感じることで「小さく産んでしまったことへの罪悪感を軽減できる」と感じていた。また、「小さいからこそ、体重が毎日気になっていて」というように、日々の体重の変化等の「小さく産んでしまったからこそ気になる内容を知ることができる」ことで不安を軽減でき、自責の念を緩和することができていた。《気持ちを吐き出すことができる》は、「どうしようもなく吐き出したかったので、正体も知られず吐き出せる、誰かに聞いてもらえる場所」「専門の方に、プロに聞いていただけたので良かったです」というように「疑問を聞いてもらえる」「専門家に話を聞いてもらえる」場所があることで、何気ない疑問でも相談することができ、気持ちを吐き出すことができていた。《面会に来るきっかけができる》は、「頂いているメッセージが楽しみだった」「行ったら必ず見るっていう

感じでしたね」というように「成育日記を読むことが楽しみであると感じる」「精神的支えになると感じる」ことで、面会に来ることが楽しみとなり、面会に来るきっかけの一つとなっていた。

【育児への自信につながる手段の一つとなる】は、《自分の知らない児の情報を知ることができる》《退院後の育児に活用できる情報を得ることができる》の2つのサブカテゴリーより構成された。《自分の知らない児の情報を知ることができる》は、入院中の授乳量や授乳時間、夜の様子や母親が面会に来ることができない日の様子を記載することで、「入院中の授乳の様子を知ることができる」「面会時間外の児の様子を知ることができる」と感じ、「知りたいと思う情報を知る手段ができる」ことで自分の知らない児の様子を知ることができていた。一方で、成育日記に記載する児の情報として「あとで副作用の話とか聞くとけっこうショックだったりするので、成育日記に記録として残してもらえたら」というように、育児情報だけでなく「治療や内服薬についての説明」に関する記載を希望する声が聞かれた。《退院後の育児に活用できる情報を得ることができる》は、「泣いているときにまずオムツ替えて、でミルクあげて、うちの子の場合は30分くらい抱っこが必要ですねって書いてあって。それでまた泣いたらミルク足してあげてくださいみたいなことが書いてあったので、なんか教科書貫ったみたいな感じ」というように、児のなだめ方やミルクの足し方等、児の特徴を踏まえて記載することで「泣いている児をあやすポイント」がわかり、「児に合わせた育児を知ることができる」「今後の育児の参考にすることができる」と感じていた。

VI. 考察

1. 看護師との信頼関係を築くきっかけとなる

今回の調査で、「担当の看護師さんとやりとりできるということが、意味があるかなって感じだった」というように、成育日記は母親と担当看護師とのやり取りができる場所となっているとの意見が多く挙げられた。看護師は不規則勤務であり、母親が毎日面会に来ても時間や勤務の都合上、担当看護師に必ず会えるわ

けではないため、担当看護師と直接やりとりをする機会は限られている。しかし、成育日記を通して母親と担当看護師がいつでも話ができる場を提供できていたのではないかと考える。また、多田³⁾は、「親の考えや心配事がわかって担当者が対応出来るとともに、家族はノートを通して児の状態や受け持ち看護師が児に注いでいる愛情を知ることが出来る利点がある」と述べている。「担当の方が、言葉を尽くしていろいろ書いてくださると嬉しい、こういう風に思ってくれていることがありがたい」というように、担当看護師が児の様子を伝えることや写真や手型・足型等工夫した成育日記を作成することで、担当看護師の児への思いを知り、児を大切にしてもらえていると感じていた。

新生児集中治療室に入院となった児の母親について、山岡ら⁴⁾は「誰かに思いを分かってもらいたかった」とそれを表出する場を求めていた」と述べている。「小さく生まれた子どもを持つ友達ってというのがなくて、持っている不安っていうのを話してもわからないだろうっていう前提で、特に話してなかった」というように、早産児を産んだ母親は、自分と同じ状況で同じ思いを抱く母親が近くにいることが少なく、孤独感を感じやすい。多田³⁾は「NICUの看護師が全体として援助することも必要であるが、個人的に信頼して相談できる医師や看護師が特定されていることは、父母にとって大変心強い」「医師に相談することを遠慮するような小さな問題でも、自分の子どもをよく知ってくくれる看護師は相談しやすいということもある」と述べており、「全部ここで吐き出して。別に深い答えをしてくださらなくても、ちょっと触れてもらっているだけでガス抜きできたっていうのが、本当に助けてもらったノートだった」というように、成育日記を通して児のことを知っている看護師に話を聞いてもらうことで気持ちを表出でき、頼れる存在が身近にいると感じることで安心感を得ることができたのではないかと考える。

成育日記は、母親の気持ちに寄り添い共感することだけでなく、母親が児に愛情を注ぎ大切にするように看護師が児を大切にしてくれていると母親が感じることで、信頼関係を築ききっかけへとつながっていたのではないかと考える。

2. 育児に対して前向きな気持ちになる

久保田⁵⁾は「出生直後からNICUに入院となる早産児の母親は、母子分離を余儀なくされるだけでなく、思い描いた出産とは異なった出発によって否定的な感情を持つといわれている」と述べている。今回のインタビューの中でも、「本来だったら生まれてすぐに一緒にいられるはずが申し訳ない」「かわいそう」という発言が聞かれた。また、「小さいからこそ、体重が毎日気になっていて」というように、研究対象である母親全員が、知りたい情報として体重を挙げており、児を小さく産んでしまったことへの自責の念を抱いていたことがわかった。しかし、成育日記にて日々の体重や哺乳量の変化などを伝えることで、「毎日どれくらい飲んでこれくらい大きくなってんだ」とあるように児の成長を感じることができ、小さく産んでしまったという自責の念を緩和できていたのではないかと考える。

大田ら⁶⁾は、「交換日記という媒体を自分の思いを言語化する場として利用することができ、両親にとって不安の解消や気持ちの整理に役立ったと考える」と述べている。「どうしてもなく吐き出したかったので、正体も知られず吐き出せる、誰かに聞いてもらえる場所」というように、成育日記に母親の気持ちを吐き出すことで気持ちの整理をすることができていた。また、「専門の方に、プロに聞いていただけたので良かったです」というように、専門家に話を聞いてもらい、必要時には適確なアドバイスがもらえることで安心感を得ることにつながったのではないかと考える。また、「頂いているメッセージが楽しみだった」「行ったら必ず見るっていう感じでしたね」というように、成育日記を読むことが面会時の楽しみとなり、面会に来るきっかけの一つになっていた。

塩崎ら⁷⁾は、「面会ノートは児の成長や様子がわかり、母と児の愛着形成をつながるものである」と述べている。「考察1」で述べたように、成育日記を通して母親と看護師との信頼関係が構築されることで、母親は気持ちを溜め込まずに吐き出しやすくなり、気持ちの整理をすることができていた。それにより、今後の育児に対し前向きになることができ、母子の絆を深め愛着形成を促すことにつながっていたのではないかと考える。

と考える。

3. 育児への自信につながる手段の一つとなる

退院後に役立つ内容について、「泣いているときにまずオムツ替えて、でミルクあげて、うちの子の場合は30分くらい抱っこが必要ですから書いてあって。それでまた泣いたらミルク足してあげてくださいみたいなことが書いてあったので、なんか教科書貫ったみたいな感じ」というように、児を寝かしつける方法やミルクの足し方等、その児の特徴を踏まえた説明を行うことで、退院後の生活をイメージする手段となっていた。また、記載してほしい内容としても、「泣いている児をあやすポイント」という意見があり、母親の知りたい情報の一つとなっているといえる。少弐ら⁸⁾は、「NICU入院という母子分離状態では、児の24時間の生活リズムや児が見せる行動の意味を母親が理解するためのサポートが重要である」「母親が面会に来ることのできない夜間の泣き、哺乳、睡眠、抱っこ、排泄の状況を記録に残すことで、入院中から退院までの児の状態を母親が把握できるようになったと考えられる」と述べている。早産・低出生体重児を出産した母親は、出生後から退院までの間、面会時間のみでしか児を知る機会がない。また、B病棟では面会時間は13時から20時と限られた時間となっている。そのため、成育日記を通してわが子を知るということはより重要なことであり、母親の知らない児の様子を知ることや退院後の育児に活用できる情報を知るとは、今後の育児への自信につながる手段の一つとなったのではないかと考える。

成育日記は母親が知りたいと思う情報を知る手段であるが、母親が知りたいと思う情報の中に「治療や内服薬についての説明」という意見が挙がった。千田ら⁹⁾は、「面会ノートの目的を両親にきちんと伝え、面会ノートの効果的な活用につなげていく必要がある」、大田ら⁶⁾は、「交換日記は両親の児に対する思いや心理状態を理解する方法であり、そのあり方の検討と認識の統一が必要である」と述べている。治療や内服薬についての説明は、本来医師や看護師から直接両親へ説明するものであり、この種の説明をすることはB病棟の成育日記の目的とは逸脱している。B病棟では

成育日記導入時、統一された説明はされておらず、その日の担当看護師が各々の言葉で説明をしている。「あとで副作用の話とか聞くとけっこうショックだったりするので、成育日記に記録として残してもらえたら」というように、母親と看護師との間で成育日記の使用方法についての認識が異なることで、母親へ精神的ストレスを与えていた可能性があるのではないかと考える。そのため、今後成育日記導入時には母親に成育日記の目的について説明を行い、母親と看護師が共通の認識の下で成育日記を使用していく必要があるのではないかと考える。また、看護師が成育日記の目的や使用方法について再度認識することで、母親へも統一した説明ができるのではないかと考える。

Ⅶ. 結論

成育日記には、母親として自分が知らない児の様子や退院後の育児に活用できる情報が記載されている。このことは、母親が今後の育児への自信を得ることにつながっている。また、看護師が成育日記を通して母親の気持ちに寄り添い共感することで信頼関係を築ききっかけとなっている。信頼関係を築くことにより母親が思いを表出しやすくなり、気持ちの整理ができ、前向きな気持ちになることができている。前向きな気持ちになることは、母子の絆を深め愛着形成を促すことにつながっていくと考える。以上から、B病棟の成育日記は、母子関係の構築や母親と看護師の信頼関係の構築において重要な役割を担っている。

成育日記を使用する際は、看護師間で使用方法を統一し、母親に成育日記の目的を説明し認識の統一することで、より効果的な活用につながると考える。

Ⅷ. 本研究の限界と今後の課題

今回の研究では、インタビューの対象が3例と少なかった。研究の信頼性を上げるためには対象者数を増やし、より多くのデータを分析する必要がある。また、今後は母親と看護師が統一した認識の下で成育日記を使用することや、成育日記の使用方法を検討していく必要があるのではないかと考える。

謝辞

今回の研究にあたり、インタビューにご協力いただいた皆様に感謝いたします。

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 1) 齊藤百合香, 藤田恵子, 村島香代, 他: NICU 内での交換ノートの有効性 - 母親の思いを看護に活かすために -. 日本看護学会論文集, 小児看護, (36): 74-76, 2005.
- 2) 垣口恵美, 寺崎成美, 森藤香奈子 他: NICU に入院経験のある低出生体重児の母親が肯定的な感情を抱くきっかけ. 保健学研究, (26): 7-13, 2014.
- 3) 多田裕: 母子相互作用と周産期の母児管理. ペリネイタルケア, 4 (8): 37-42, 1985.
- 4) 山岡伸江, 河井見如, 松田美穂 他: 未熟児病棟へ入院した児を育てる母親の思いとその変化 ~ ノートを活用した交流の有効性 ~. 四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌 看護集, 1 (2): 79-82, 2014.
- 5) 久保田由美, 高橋麻希, 平井香名: 押さえておきたい知見はこれだ! 早産予知・対応のための最新スタンダード早産児の育児支援. ペリネイタルケア, 30 (2): 135-140, 2011.
- 6) 太田千寿, 岩月悦子, 内田美恵子: 両親と看護師間で行う交換日記の効果に関する検討. 第14回日本新生児看護学会講演会講演集, 222-223, 2004.
- 7) 塩崎真理, 柴田彩子, 森畑智子: NICU 入室患児の母親にとっての面会ノートの有用性. 淀川キリスト教病院学術雑誌, 23 (2): 21-24, 2006.
- 8) 少式夕起子, 鳥袋弘恵, 山城一奈 他: NICU における母親のエンパワメントの変化 - 育児日記の導入を試みて -. 沖縄県看護研究学会集録, 28 回 1-4, 2012.
- 9) 千田理恵子, 鈴木由美, 川村啓子: 面会ノートの有効的な活用の検討 - 両親が望む面会ノートとは -. 仙台赤十字病院医学雑誌, 16 (1): 63-67, 2007.